

⑮ 班活動

佐藤 班の編制は、男女が混じった四人がいいと、経験的には言われています。三人ですと、一人はずれる子どもが出たときに、その子の行き場がなくなる心配があるし、五人になると、机をつけたときに、一人が物理的に遠くなってしまいます。性別が偏ると、日常的な人間関係を引きずってしまうことがあります。

フク だとすると、班編制は、ある程度、教師が仕組まないといけませんね。

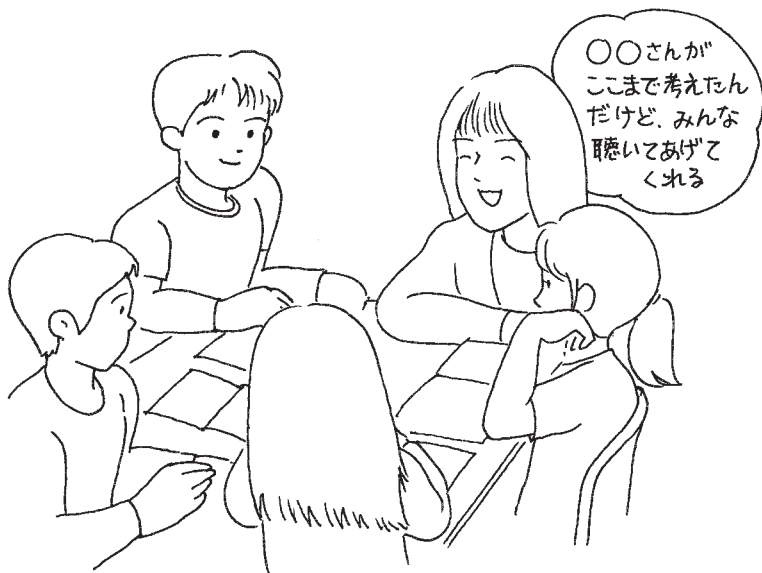
佐藤 はい。子どもたちには、「学び」のための班なのであって、ふだんの仲良しグループとは違うのだということを、きちんと伝えましょう。

フク とはいえ、それでもつながりにくい子どもはいますね。

班の活動ではまず、「個人作業の協同化」を図りたいですね。その際、できない子どもにも教えてあげるようしむけるのではなく、分からないでいる子どもが訊けるような手助けをします。作業がはかどらない子どもは、困っていても何をどう尋ねていいのか分からずにいます。そんなときは、その子がどこまでできていて、どこから分からないのかを区別してあげます。そうしておいて、「さっき分からなかったところを、友だちに訊いてごらん」と促します。なかなか言い出せなければ、「○○さんが、このところ分からないみたいなんです、上手に説

「明できる人いる？」とつなぎます。こうしてつないでもらうと、班の仲間もその子にかかわりやすくなります。周りの子も、その子へのかかわり方が分からずに困っていますので。

同じようなことですが、仲間の話に入っていない子どもには、加わる準備をしてあげてください。いきなり「いっしょに話してごらん」と背中を押すのは酷です。たとえば、教科書に自分なりの考えを書き込ませてから、周りの子どもにつなぎます。「〇〇さんがここまで考えたんだけど、みんな聴いてあげてくれる？」と。最後に一つ。教室が騒々しいと仲間の声が聞き取れない子どもがいます。そういう場合、「お隣の班の邪魔にならない声の大きさでお願いします」と指示します。



①9 依存的自立

フク 「ケア」のもう一つの側面が、「訊く⇨依存」でした。困ったときには、人に訊くということです。

佐藤 必要なときに人に頼ることは、「困り感」を抱きやすい子どもにとって、とても大切です。にもかかわらず、それがなかなかできないでいるのが、この子たちです。

フク 授業中に分からなくても訊けずにいる、何をどう訊いたらいいか分からずにいるのです。

佐藤 はい。そこを何とかしてあげなくてはいけません。人に上手に依存しながら、自立できるようにしたいのです。「依存的自立」です。

人に何かを頼むとき、私たちは、頼みをきいてくれそうな人に、頼みに応えてくれそうな内容を、頼んでも大丈夫そうなタイミングを見計らって頼んでいます。このような「技」を身につけるためには、相手の感情や、置かれている状況を巧みに読み取りながら、練習を積んでいくほがありません。

ところが、これが思いのほか難しい。「困り感」のある子どもは、だいたい苦労しています。

上手に依存することができないまま年齢を重ねていくと、いずれ、大人になって困るのは本人です。どうにか就職が決まり、持ち場を任せられることになるのですが、分からないときにうまく尋ねられないので、与えられた仕事がちんとこなせていません。「困ったときには訊きなさいと言ったでしょう」と諭す上司に、「どうやって尋ねたらいいのか、分かりませんでした」と答えてしまいます。それで、仕事が続かなくなるのです。

人に頼れるようにするには、誠実に応えてくれる仲間を育てることから始まります。せっかく頼んでも断られてしまったら、傷つくだけです。そのうえで、この子たちには、訊いて分かって、あとは自分でできたという経験をさせたいのです。こうして、「依存的自立」に導きます。



大人になって困るのは本人です